みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

黒タイ語のキン（たべる・のむ）(世界の食を言語する アジア・極北編 6:黒タイ語）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫永, 真佐夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5776

6
黒タイ語

黒タイ語のキン（たべる・のむ）

キン・チエン（正月）を祝う宴会。男女はわかれて座り、席次も明確である（写真：筆者撮影）

国立民族学博物館准教授
樫永 真佐夫
（かしながまさお）

Profile

1971年生まれ　兵庫県出身
専門分野●東南アジア民族学
著書●『ベトナム黒タイの祖先祭祀』、Written Cultures in Mainland Southeast Asia（編著）、『東南アジア年代記の世界』

西北ベトナムから北ラオスにかけての盆地には、黒タイとよばれる稲作民がいる。名前から想像できるとおり、彼らの日常語は、タイ、ラオスの公用語であるタイ語やラオス語に近い。

村で人に会うと、「キン・カウ・レオ・ア？（ごはん、たべた？）」と、挨拶がわりによくきいている。食事したかどうかは、無難な話題なのだろう。日本人がとりあえず天気のことを言ってみるようなものだ。

キン・カウで、「ご飯を食べる」。この場合、キンは「たべる」ことだが、このキンは、日本語の「たべる」とは、少し異なっている。

まず、「たべる」も「のむ」も、キン。のどを通るのが、液体か、固体かを区別しないのだ。タイ語だと、液体にかぎってドゥムという語もつかえるが、黒タイ語にこの語はない。ただし薬をのむときは、どちらのことばでもキンを使う。

ベトナムにすむ黒タイにとって、公用語はベトナム語だが、ちなみにベトナム語では、「たべる（アン）」と「のむ（ウオン）」をはっきり区別する。しかも、面白いことに、薬に関してはウオンをつかう。煎じ薬を服するほうが、近代医療以前には一般的だったからではないだろうか。

黒タイの村では、たいがい女性たちの方が早起きだ。床下のブタやニワトリがお腹すかせてさわぎはじめた薄明、いろりの火をおこし、水くみに行く。家畜にエサをやって、外に放つと、前の晩の残りをほおばるだけで、脚絆を巻き、いそいそとたきぎをとりにでかけていく。あとから男たちが起き出して、ごそごそと前日の残りをあたため直し、朝食にする。これがキン・カウ・チャウ。チャウが「朝」で、文字通り「朝ご飯」だ。

このあと正午頃、家族そろってキン・ガーイ、日暮れどきにキン・ライン。それぞれ、昼食と夕飯にあたる。

要するに、黒タイも一日三食が基本だ、と簡単に納得してはいけない。なんと、かつては一日五食だった。小学校の午前のクラスが、朝七時から一一時で、午後のクラスが午後一時から五時。過去半世紀の間に、子どもの就学時間や、

役所などの就業時間にあわせて、家族の食事時間がかわり、一日三食になったのである。

五食だったころも、まず起きぬけにキン・カウ・チャウ（朝ご飯）。それから、たきぎとりやら農作業やらをして、日が高くなってきてから、おちついて腹ごしらえする。それがキン・ガーイ。そのあと、もうひとふんばり精をだし、太陽が南中するころキン・カウ・ヴェン（午餐）。ひと寝入りしたら、昼下がり、また野良に出る。日暮れ前に夕食のキン・ライン。そのあと、夜なべしたり、囲炉裏端で客人と語ったりして、お腹がへったら、さらにキン・カウ・カムの夜食をした。

これら五つのうち、キン・カウを含んでいない、キン・ガーイ、キン・ラインこそが、メインの食事だった。伝統的に、黒タイはもち米をおこわにしてたべるので、五回もまともにたべたら、腹がもたれて労働どころではない。わたしなど、一日二、三回でも、たべすぎて動けなくなり、腹を上につきだして寝っ転がっているものだ。

村の暮らしでは、たべること、それもたくさんあつまって、酒をくみかわし、ゆっくり時間をかけてたべるのは、大きな楽しみである。電気が普及する前は、ことのほかそうだった。もちろん人生儀礼、年中行事には、宴会がつきものである。宴会こそがメインといって過言ではない。結婚式では、たいがいが、祝辞だの、親族どうしの交換だの、形式ばった儀礼なんかそっちのけで、しゃべりまくり、のみまくり、たべまくっている。双方の親族による歌合戦なんかもふくみながら、宴は一日中つづく。

結婚式は、黒タイ語でキン・クオイ、またはキン・ドン。クオイは、結婚を意味するベトナム語からの借用だから、キン・クオイよりキン・ドンの方が古いことばだ。いずれにしろ、キンを頭にもってきているのは、会食ぬきには成立しないからだろう。しかし、新郎新婦は食事そのものから、ほぼ排除されている。わずかなあいだ登場して、簡単な儀式をすませ、客人たちに冷やかされ、宴席をもり上げるだけのことだ。

陰暦一月一日を祝う正月も、キン・チエンといい、キンをふくんでいる。一月をブオン・チエンというので、キン・チエンの字義は、一月の会食だ。

葬式にも宴会はつきものだが、こちらはゼット・ヘオといい、キンをふくまない。その他、病気の治療儀礼などするにも宴はつきものだが、キンなんとかとは言わない。おめでたい結婚と正月のみ、キン（食べること）を楽しむことをおおっぴらに宣言していいらしい。

とはいえ、よそのくに（ムオン）を征服するのはキン・ムオン。戦争の不幸をよそ目に、このときばかりはキンをつかう。たべねば、たべられたからだろうか。

10日に1度お供えをして、亡くなった祖先に食べ（キン）させる（写真：筆者撮影）